

## カスタムボディーとサイバー街



「私の生まれ変わったこの体を見て」

---

「こんな私を彼は愛してくれない。こんな私じゃ、あなたは振り向かない」

1人の少女が、紫色の蛍光色を放つ高層ビルが立ち並ぶ通りを、独り言を呟きながら歩いている。

時は2200年。高度に発展した科学技術により建物の耐震性が向上し、1000階建てを超える超高層ビルも作られるようになった。生命科学も発展し、ガンを治療する薬は薬局でも買える程に一般的になり、健康寿命も飛躍的に伸びた。

仕事はAIがこなすようになり、世界は娯楽に溢れ、政府からは毎月一定の額の金が振り込まれる。1日中遊んで暮らせるようになり、2000年代初期と比較したら、うつ病患者はずっと少ない。

しかし、そんな世界でも悩み事は絶えない。それは自身の「身体」に関する悩みである。

「私には集中力がない。運動脳力もなく、友達のようにスポーツを楽しむこともできない。空間認識能力も弱く、私の憧れる絵師のようなイラストも描けない。言葉遣いも幼稚であり、文章を書くのも苦手なんだ」

少女は自身の能力の低さを嘆く。

「他にも、私はもう二十歳なのに、見た目が子供みたいだ。胸も小さい。これは紛れもない、貧乳の中の貧乳である」

少女、否、女性と表現すべきであるが、そう言い表すのが滑稽と思える程に見た目が幼稚で、成人しているようには見えない。さらに胸元だけをはだけさせて写真を撮り、それを友達に見たのならば、男の胸の写真なんて見せてどうした？と言われるぐらいに、起伏がない。これは貧乳の中の貧乳である。



「私には年上の好きな先輩がいるのに、こんなバカで、身体にも一切の魅力がない私なんて、振り向きもしないに決まってる」

好きな人がいる。しかし、知能も低く、貧相な身体の少女を好きになることはないだろう。だけれど、大好きな彼を振り向かせたい。付き合いたい。なんならセックスしたいと少女は考える。

「だから私はここに来たんだ」

カスタムボディー。それは、高度な科学技術により、知能の向上、身体の改造、顔の整形を行ったものを言う。今少女がいる都市、サイバー街と言われる街で、その手術が可能である。

サイバー街は、この科学技術が発展した2200年の世界の中でも、特にエリートが集まり、最先端の技術を研究し発展した場所だ。

カスタムボディーという技術を確立し、そのカスタム手術はこのサイバー街でしか行うことができない。その技術は非公開であり、自分の身体や知能に不満を持つ者は皆、このサイバー街でカスタムボディーを手に入れることができる。

「集中力を付けて、言語能力も向上させ、空間認識能力を上げて美しいイラストを描けるようになりたい。運動能力を上げてスポーツを始め、さらにこの貧相な胸を大きくして、顔つきを大人びたように変化させたい。そうすれば、私の好きな彼も振り向いてくれるはず」

彼女は大好きな男の子を振り向かせるため、カスタム手術を受け、少女の理想とするカスタムボディを手に入れることを決めた。

「今日手術を予約していたのですが」

「あらいらっしゃい。こちらへどうぞ」

さっそく手術室に連れていかれた。部屋には様々な機械が立ち並ぶ。

胸を大きくすること、顔を大人びたものにするのは 2000 年代初期にもあった整形手術であるが、知能を飛躍的に向上させる手術とは一体どんなものなのか。技術は秘密にされているため分からないが、こんな素晴らしい手術を行える科学力には、本当に感謝しかない。

「あの先生。今日手術を予約していたリンですが」

「今日はよろしくねリンさん。君は色々オプションが多いみたいだね」

「はい。頭を良くしたくて、集中力、言語能力、空間認識能力の向上をお願いしてあります。運動能力向上や、恥ずかしいけど、胸を大きくして、もっと大人びた顔にしてほしいです」

「なあに、恥ずかしいことはないさ。このサイバー街の科学力を使えば、君は生まれ変わるよ」

そして手術は始まった。リンに麻酔が打たれ、静かに眠りにつく。今回の手術はオプションが多いため、手術時間は 23 時間にも及んだ。

しかし手術は大成功し、リンは見違えるほどに生まれ変わった。

「リンさん、手術お疲れ様です。早速、鏡で生まれ変わった自分の姿をご覧ください」

「これが私。これが生まれ変わった新しい私！」

リンの知能、身体的特徴は別人とも思える程に生まれ変わった。リンは目が覚めた途端、高校生の時に受けた数学の授業を思い出した。昔は黒板に書かれた数式の意味を理解できなかったが、今思えば、なぜあんな簡単なものを難しく考えていたのだろうか、そう思うようになった。さらには身体が異常なまでに軽く、しなやかで、運動能力が高まったことを直ぐに感じた。

さらにはこの豊満な胸。この大人びた顔。前のリンとは全く別人のようになっていた。

「これで、私の大好きな男の子を振り向かせることができる」

リンは早速、大好きな男の子を夜の街に誘うことに決めた。彼の名前をアオイと言う。アオイ君はとても優しく、スポーツ万能で、頭もいい優等生だ。リンはそんな彼に一目ぼれした。

今日彼は大学でバスケットボールの練習がある。そしてその帰りに、リンはアオイ君をホテルに誘い出そうと決めたのだった。

「あら、ごめん。ぶつかっちゃったみたい」

「こ、こ、こちらこそごめんなさい。怪我はないですか」

リンはアオイと故意にぶつかり、アオイと話すきっかけを作る。ぶつかったアオイは少しよろけ、転びそうになった所でリンが相手の身体を引き寄せる。そして自然な流れでアオイの頭をリンの豊満な胸でキャッチし、相手を誘惑する。

胸元が少し緩い服をわざと着衣し、アオイの頭が胸に押し当てられると同時に、そのポジションからは乳首がちらりと見えるようにブラの位置をずらした。

リンの大きな胸とその乳首・乳輪を見てしまったアオイは少し動転してしまい、恥ずかしそうに謝罪する。

「こちらは全然大丈夫よ、アオイ君」

「あれ、なんで僕の名前を知っているんですか」

「この前スポーツの大会で表彰されてたから覚えてたんだよ」

「そうなんですか。あ、そうだ。あなたのお名前はなんて言うのですか」

「私はリンと言います」

「へえ、リンさんですか。いい名前ですね。実は私の知り合いにもリンと言う友達がいまして、結構人気の名前なんですよね」

その知り合いのリンがアオイの目の前にいる私なのだが、本人は気づいていないらしい。これはいける、そう確信したリンは、アオイに畳みかける。

「スポーツもできるし、アオイ君、かっこいいね。今日ちょっと、デートに行ってみない」

「そ、そ、そんな。デートだなんて」

「いいでしょう？遊びでもいいから、ちょっと私と遊ぼうよお」

リンはアオイに畳みかけ、夜の街に連れ出そうとする。その誘惑にアオイは耐え切れず、オーケーサインを出した。

「リンさん、今日初めて会ったばかりだけど、とても綺麗ですね」

「そう？ありがとうございます。でも、敬語じゃなくていいよ。もっと気軽に話そ」

「うん。リン、今日はよろしく」

リンはついにアオイを連れ出すことに成功した。しかし、今日だけの関係で終わらせたくない。その一心で、リンはアオイに提案する。

「リン、今日はどこに行く？」

「そうだね、どうしようか。いいお店あるんだけど、もう夜も遅いし、ここはどう？」

リンはアオイに対してスマホで今から行きたいお店の写真を見せた。

「これはホテルですか？でもまだ寝る時間ではないですよ？お泊りですか」

「違う違う、この看板の文字を見て」

示されたホテルの写真を拡大してみると、看板には小さな文字で「ラブホテル」と書かれていた。

「これは！」

「いいじゃない。ワンナイト、嫌いなの？さっき私の乳首を凝視した癖に」

「違う、あれは事故で！」

「そう恥ずかしがらないでいいのに。ホテルに行けば、乳首だけじゃなくて、ここも見たり、舐めたり、あなたのペニスを入れたりできるのよ」

リンはアオイの手を無理やり掴み、自身の胸に押し当てたかと思えば、少しずつ自身の女性器とクリトリスの方へ誘導する。さらにはスカートの中にアオイの手を無理やりいれ、愛液でぐしょぐしょに濡れたパンツを触らせた。

「すごい、こんなに濡れてる」

「だって今、すごい興奮してるんだもん」

アオイは自身の性欲を我慢できなくなり、リンの誘惑に負けてラブホテルへと向かってしまった。

リンには多少の罪悪感があった。しかし、アオイを手放したくない一心で、ホテルへ連れ込むことを決意したのだった。

ラブホテルの中に到着したリンとアオイはそれぞれシャワーを済ませ、アオイがお風呂から上がる所をパンツとブラになったリンが迎える。

「どうこの大きな胸。乳首もこんなに硬くなってるのお」

リンはアオイに自身の大きな胸を見せた。メロンサイズと言っても嘘ではない程大きく、布生地ブラの表面には硬くなった乳首による凹凸ができていた。



「リンの胸、大きくて、凄い魅力的だよ。触ってみてもいい？」

「いいよ、ほら早く」

アオイはリンの胸に優しく触れた。なんて柔らかいのか。胸全体がふわふわとした感触をしており、アオイは激しく興奮して、豊満な胸を撫でまわした。

「もう、そんなに激しく触って。あなたのペニスもかなり大きくなってみたいね。パンツからはみ出しそうなくらいに大きくなって。パンツの中に収めるのが苦しいでしょ？早く出しちゃいなさい」

リンはアオイのパンツの中に手を入れ込み、大きくなったペニスを優しく掴む。表面は血管が浮き出ているのか、小さな起伏に触れる感触があった。掴んだペニスをパンツの中から優しく取り出そうとするが、パンツのゴムの部分に亀頭が引っ掛かり、少し力を入れて手前に引いたら、ぶるんとペニス全体がパンツから飛び出してきた。

「ああ、もうこんなに大きくなって」

「しょうがないでしょ。だってリンさんのこんな大きい胸を見たら、興奮せずにはいられないんだもん」



「本当にアオイ君、私を見て興奮してるんだね。嬉しい。私も愛液がまんこから溢れだして、太腿の付け根が濡れてるのが自分でも分かるの。興奮してしまって、勝手に肛門も大きく開いたり閉じたりしてる。早く私の興奮の証を見せたい。見て、アオイ君」

そう言って、リンはブラとパンツを脱ぎ棄て、ベッドに四つん這いになった。そしてアオイに対してお尻を向け、足を少し開いてやる。すると、リンの女性器からラブジュースが漏れ出て、さらにアナルがガパッと大きく開いているのが分かった。



「こんなに興奮してるんだね、リン」

「アオイ君もそんなにペニスを大きくして、早く入れたいんでしょ」

「うん。早くリンのいやらしい女性器に、ギンギンに勃起してしまったペニスを押し込みたい。だけど、まずはリンのエッチな姿をもっと間近で見たい」

アオイはリンをベッドから立たせて窓際に移動させ、軽くしゃがませた。

「そのしゃがんだ状態で、足を少し開いてくれない？ リンの開いたエッチなまんこが見たいんだ」

「こうかな、こうかな」

「もっともっと」

「これでどうかな、はあ、恥ずかしい。見える？ 私の愛液が滴るまんこ」

「もっと、もっと開いて、まんこの奥の子宮まで見えるように」

「ああん、ダメ、そんなに手で足を広げないでえ。まんこの中に溜まった愛液が垂れてきちゃうからあ」

リンの足をアオイが軽く押し当てるようにして開き、それに伴い、まんこの中に溜まった愛液がどろどろと漏れ出してきた。

「こんなに興奮して、結構変態さんなんだね、リンさん」

「こんなに押し広げてまんこを見られたら、恥ずかしいに決まってるでしょお。でも嬉しい。私の大事な所を、アオイ君に見てくれて。何も隠さない。私の全てを見てえ」

リンとアオイは極度の興奮状態に達した。しかしアオイは、その僅かに残る理性で自分を制し、ギンギンに勃起したペニスを彼女のまんこに挿入する前に、彼女に気持ち良くなってもらおうとホテルから提供されたバイブレーション機能付き dildo を持ってきた。

「これは？」

「さっき受付から貰って来たんだ。バイブレーション機能のある dildo で、表面には適度な起伏があって、まんこの中全体に刺激が与えられるようになってるんだってさ。dildo を挿入しやすいように、ここに座って片足を上げてみて」

部屋にある小さなソファーにリンを誘導し、片足を上げさせる。先ほど足を開脚させた時に比べて、その姿勢からまんこは閉じてしまっている。アオイは、その閉じたまんこの隙間にディルドを当てて、漏れてくる愛液を表面に塗りたくった。そして、少し力を入れるようにまんこにディルドを押し込むと、閉じたまんこの隙間からディルドがニュルッと侵入し、彼女の締まった女性器がその侵入者を締め付け始めた。

「ああ何これ、凄い気持ちいい。まんこの中全体に刺激が与えられて、バイブするディルドを私のまんこで締め付けた瞬間に、異常な快感が走るの。ああ、やばい、どうしよう。愛液が止まらない。ごめんなさい、ちょっとソファーを汚しちゃうかも。でも我慢できない、ああ、ごめん、あっ、あっ、あっ、あっ」

「いいよ汚しても。地面がヌルヌルになるぐらい、もっと激しく愛液を出して」

彼女の愛液がバイブレーションと共に飛び散り、一定のリズムでまんこが潮吹きを始めた。もちろん、既にソファーは彼女の愛液と潮でヌルヌル、ぐしゃぐしゃになってしまっている。

「ああああ、ダメ、ダメ、こんなに汚したら」



リンは流石に自分の愛液で床がヌルヌルになるのは申し訳ないと思い、愛液がまんこから流れ出ないように、まんこの入口を強く締めた。

しかしアオイはつかさずバイブレーションの強さをマックスにまで上げた。すると、リンのまんこがディルドを強く締め付けたせいで強烈な刺激がまんこ全体に伝わり、耐え切れなくなったリンが脱力してしまった。

その瞬間、今まで蓄えられた愛液がドピャッとまんこから漏れ出し、勢い余ってアオイの顔面もぐしゃぐしゃに濡らしてしまった。

「あああ、何やってるのアオイ、そんなにバイブを強くしたら。あ、あああああ、気持ちいい、はあ、はあ、はあ、ああダメダメダメ、我慢できない、ああああ、あっ」

耐え切れなくなった彼女の女性器は潮を噴きだし、それをアオイの顔面に浴びせるように放出する。

「あああ、ごめんアオイ君、我慢、我慢ができなく、てえ」

「そんな、もっと出していいんだよ。もっと、君のことを知りたい。君の体液も、その匂いも味も、全部知りたいんだ。もっと気持ちよくなって、リン」

アオイとリンはベッドに移動する。リンの鼻息は荒く、自身が移動したことすら記憶にないほど、自身の濡れたまんこ、全体を支配する快楽に意識が集中する。アオイはリンを四つん這いにさせると、ホテルに到着したばかりとは比べものにならない程、まんこはどろどろに濡れ、愛液が飛び出し、肛門が大きく開いて激しく収縮するようになった。

そしてリンは今初めて、アオイに四つん這いにされ、激しく収縮する肛門と自身のまんこを凝視されていることに気づく。



「はっ、アオイ君何してるの、見ないで、流石に恥ずかしいよお。そんなに私のまんことアナルを凝視して。でも、でも、止められないの。勝手に愛液が溢れ出てくるし、アナルはさっきから閉じないし、勝手に収縮して」

「いいんだよリン。もっと興奮して、もっと感じて。ああ、僕ももう我慢できない。もう、このはちきれんばかりに勃起したペニスを、リンのまんこに入れないと気が済まない。ごめん、自分勝手だけど、我慢できない。もう入れる、入れるよリン。ダメって言っても、もう我慢はできない」

興奮を抑えられなくなったアオイは、普段は紳士的な対応をするにも関わらず、理性は吹き飛び、本能のままリンのまんこにペニスを入れた。アオイは興奮の余り、どのような体位で挿入するかまで考えられなくなっていた。恥ずかしがるリンを背後から自身の下半身へなぎ倒し、そのまま可憐で大人びた女性のまんこに、自身のギンギンのペニスを入れ込んだ。

「ああ、アオイ君、そんな急にあなたのペニスを入れてくるなんて。そんなに興奮して。あっ、あっ、気持ちいい、気持ちいいよお。アオイ君、ああ気持ちいい。アオイ君、アオイ君、アオイ、アオイ、好きだよ、アオイ」

「ああリン、こんなに僕のペニスを締め付けて。君のまんこは熱くて、リンの温もりが僕に流れ込んでくるよ。こんなにちゅぱちゅぱと、いやらしい音を立てて。本当に変態な女だな、リン」

本能のままにアオイがリンにペニスを挿入した結果、アオイは肛門丸出しの状態からセックスされ、侵されている。



「私をもっと侵して、もっと私をあなたでいっぱいにして。もう私はアオイのものだよ。もっと侵して、罪悪感を感じるくらい、背徳感を感じるくらい、ペニスをまんこに突き刺してえ！」

「ああ気持ちいいよリン。我慢してるんだけど、睾丸に溜まった精子がもう発射しそう。ペニスに力を入れて我慢しようと思っても、硬くなったペニスをリンのまんこが締め付けてくるから、余計に快感が伝わってきてえ。あああ、もうダメだ、耐え切れない、ダメだ、もう射精しそうだ」

「我慢しないで！！私のまんこに射精しなさい。もっと激しく突き刺して、子宮の中にアオイの精子を全て流し込んでえ！」

「ダメだよお、ゴムもしてないのに」

「いいよアオイ君なら。子供できちゃっても、幸せにしていけるよ。私とアオイ君なら」

「あああ、やばい、本当に出る、出る、出る」

「ほら、もっと締め付けてあげる。出して、中に出して、私をママにしてえ」

「ああ気持ちいい、リン、リン、そんなに締め付けたらあ！ああ、リン、好きだ、好きだ、もう我慢できない、中に出す、ああ、イク、イクイクイクイク、あっ、あああああ！」

リンはアオイのペニスをまんこの中に押し込み、子宮口と亀頭が接するように押し当てる。アオイの腰が痙攣し、それに伴いペニスが抜けてしまわないように、リンはまんこでペニスを強烈に締め上げ、ペニスを逃がさないようにホールドする。

アオイの精子が盛大に発射され、子宮口を突き抜けて、子宮内部に直接流れ込む。想像を絶する快感がリンの身体を突き抜けた。リンは全身をがくがくと振るわせて脱力し、アオイのペニスがリンのまんこからヌルッと飛び出る。

リンのまんこから飛び出したアオイのペニスの先からは、リンとのセックスの余韻を残すかのように、残りの精子がドロっと溢れ出し、彼のペニスを伝ってベッドに水溜まりを作った。

「最高のセックスだったわ。こんなに中に出して、アオイ君はエッチなんだから。ほら見て、こんなに私のまんこからあなたの精子が溢れ出してえ。ママになっちゃうんだからあ」



2人はセックスの余韻を味わうかのように、1晩を抱きしめ合いながらベッドで過ごした。その後、正式な交際を約束し、昨日の快感がまだ自分の性器に残るのを感じながら、帰宅した。

「アオイ君とのセックス、本当に気持ち良かった。これも全て、カスタムボディーのおかげでだわ」

最初は貧弱だったリンの身体であるが、サイバー街でのカスタム手術により、胸ははちきれんばかりに大きくなり、女性器も名器へと変化した。さらには幼稚であった彼女の顔は大人びたものに変化し、さらには知能向上の手術により、言語能力、記憶力も飛躍的に向上した。それにより、会話をする際には頭が異常に働き、話題が次々と浮かんでくるようになり、コミュニケーション能力も向上した。

「私がこんなに立派な大人になれたのも、カスタム手術のおかげ。どんな手術を行っているかは秘密にされているけど、この科学力、本当に惚れ惚れするわ」



サイバー街で行われるカスタム手術は神にも匹敵する。その科学力により、リンを生まれ変わらせた。この手術のおかげで、リンはアオイとの熱いセックスを行い、交際にまで持っていた。

そしてリンとアオイの交際が始まり、半年が経過した。そして、アオイからこんな話題を持ち掛けられた。

「ねえねえ、リン、知ってる？カスタム手術って」

「えっ」

リンは一瞬ドキッとした。アオイからカスタム手術の話題が飛び出し、もしかしたらその手術を経験していることがばれたのかと思ったからだ。

「いや実はね。昨日カスタム手術のニュースがやってて、僕、初めてその手術のこと知ったんだよね」

「あっ、そうなんだ。ニュースで取り上げられてたんだね」

リンの勘違いは杞憂に終わった。どうもアオイは昨日、カスタム手術を始めてニュースで知ったらしい。リンがカスタム手術経験者であることがばれた訳ではなかった。

「それでね、リン。一応注意しよかなって思ってさ。リンはもう十分素敵な女性なんだから、上を目指してカスタム手術なんて受けちゃダメだよ？」

「アオイ君はカスタム手術否定派なの？」

「いや。その人に害がなければその人の自由だから大賛成だよ。だけど、これ見てよ」

そう言って、アオイはスマホでニュースアプリを開き、リンにカスタム手術に関する記事を見せた。

題名は、「カスタム手術の闇取引と、脳組織の交換に関する違法性」であった。リンは目を見張り、思わずアオイのスマホを手に取り、画面をスクロールし、記事を読み始めた。

記事にはこう書かれていた。

「カスタム手術の手法に関して。長らく秘密にされていたカスタムボディーの仕組み、それは人体パーツの交換であった。始めに、事故死または突然死した人間をドナーとし、損傷していない身体パーツと脳の一部を摘出する。

もしも患者に集中力を付けたければ、脳の理性を司る部分、つまり前頭前野を優秀な他人の前頭前野と交換する。

もしも患者の運動能力を上げたければ、脳の運動を司る部分、つまり運動野を運動成績の良い他人の脳と交換する。

もしも患者の言語能力を上げたければ、脳の言葉を司る部分、つまり言語野を言語能力が高い他人の脳と交換する。

もしも患者が自身の胸、足、性器に不満があるのなら、損傷のないドナーの身体パーツと交換する。

これらの手術は全て違法であり、サイバー街はこれらを違法であると知りながらカスタム手術を続けていた。被害者は数百万人を超える。これらの被害に会われた方は、以下のカスタム手術相談センターにまで、至急お越しく下さい」

リンはその場にアオイを置き去りにして、記事に書かれていたカスタム手術相談センターに急行した。そこは異常なまでに混雑し、被害者の数が伺えた。リンは人込みをかき分け、窓口の職員に話を付けた。そして1時間後、近くの脳外科を紹介され、脳をCTスキャンすることになった。

そこで、医者は残酷な宣言をする。

「リンさん、あなたはカスタム手術で、何の能力を上げたのですか？」

「私は、私は確か、えっと、そう、言語能力、運動能力、空間認識能力、集中力、それと豊胸と、顔の手術と、えっと、えっと」

「ええ分かりました。事態は一刻を争います。何をしてあげられるかは分かりませんが、こちらの画像を見てください」

医者は、CT スキャンした脳の画像を見せてきた。脳の中央の極小さい領域だけ、赤色のペンで色が塗られている。

「先生、この画像は何ですか？」

「脳の画像は、あなたの今の脳の状態を表しています。この赤色のペンで、脳の画像の一部の本当に小さい領域が赤で塗りつぶされているのが見えますか？」

「ああ、どうしよう。先生、もしかして手術の結果、この小さい赤丸で塗られた脳の部分に異常が起きてるのですか」

「いいえ、違います。誤解ですリンさん。この小さな赤丸で囲まれた脳の部分だけが正常なんです！

リンさん、あなたの脳のほとんどは、カスタム手術により他人の脳と交換されています。そしてこの赤色部分だけが、交換されずに済んだあなたの脳なんです。

すみませんが、あなたはリンさんと呼べるかは分かりません。多少、この残された脳に記憶があったから、自分の名前をリンと覚えてはいるかもしれませんが。

あなた、生まれはどちらで、小さいころは何を食べ、母親と父親は何人ですか？」

「何を言っているんですか先生！私はイギリス生まれで、小さい頃は主食のインド料理を食べて、母親はアメリカ人で、父はモンゴル人に決まっているじゃないですか！」

「ああ、なんてかわいそうに。脳の各部分を様々な人の脳と交換した結果、ドナーの記憶と自分の記憶が入り混じってしまっている！

あなたはもうリンさんではありません。人の脳が混ざり合ってきた、別の何かです！」